

<津川武一日記抄>

一九五一年（四一歳）

一月十六日

親方町二八に診療所と住宅を移す

日付不明

一九五一年を送る。

医師としてはレントゲンをそなえつけて、精神医よりむしろ内科に転じた形、引田氏とともに医院を経営することになった。

一九五二年（四二歳）

一月一日

生活協同組合設立趣意書

国民の健康を増進し、医療費を軽減するために考慮すべき事項が数々あるうちで、われわれは次の事項を国民互助の精神により解決するためにここに保健生活協同組合の設立を提唱する。

第一に国民の間に健康保持、疾病予防等についてもっともっと教育を広めなければならない。われわれは保健生活協同組合によってこれを充したい。

第二には生活環境を衛生的に改善しなければならない。農村食事、炊事、便所、採光等について調査、指導、啓蒙をしなければならないし、産児調節もことに考えなければならない。われわれは保健生活協同組合の設立によってこれを充したい。

第三には医療費を軽減し、医療費を互助の精神によって確保しなければならない。そのためには国民健康保険組合が一番目的に合致した方法であるが、われわれの地方では折角の国民健康もつぶれたり、機能を果していないところも（以下欠）

二月二十四日

設立総会めでたく成立

国民の健康増進めざして

注目の的であった津軽保健生活協同組合は、津軽の市民、労働者、農民の要望で国民の手で、ついに成立した。

十一月六日

診療、〇〇君インシュリン注射直後の大発作、入室させる。

十二月一日

一九五二年の回顧

津軽保健生活協同組合の提唱と組織

総選挙

大清水療養所の建設

父の病気

りんご豊作

一九五三年（四三歳）

一月十四日

津軽保健生活協同組合

一九五三年度事業計画案

一、 診療施設を組合員その他に利用せしめる事業

1, 品川町健生医院、大清水病院、五郷出張所を運営する（一般予算）

2, 大清水病院給食、看護施設を完備する

3, 大清水病院付近を美化する

（2, 3, は特別予算をくむ）

二月三日

火事出すな 吉内での集会

二月二日五郷村吉内での組合員総会は六人あつまって、われらの大清水診療所で火事出  
すなど、組合本部に申し入れてきた。その理由として個人病院でないところでは、黒石  
の津軽病院、弘前の津軽病院、浪岡でも津軽病院が火事で焼失したということであった。

二月二十五日

われを頼って死んだ人の病歴を

よみつ思うは充分尽くせしや

二月二十七日

大清水の登記おわる。

四月二十日

第五〇回精神神経学総会に出席して感じたこと

一、総会は全く西欧ヨーロッパ医学であることだった。

ここには日本の医学もない。ソ連の医学もない。私はソ同盟の精神医学を日本に紹介するため、ロシア語を学ばねばならない。

二、精神神経医学を小説におとしはならない。

神経症問題で、島崎俊樹教授は科学を小説にすりかえる観念論を展開している。島崎教授は自由を観念にすりかえている。村松教授又しかり。

神経症論でもパブロフ的なものを日本に導入しなければならない。

そして弘前で私がすぐ為さねばならないこと。

- 一、ロシア語を勉強すること
- 二、パブロフ学説を勉強し展開すること
- 三、きつねつきといたこの本態を究明すること
- 四、農村医学を樹立すること
- 五、そら手の究明をはじめること

五月四日

大清水病棟の整備中々に進まない

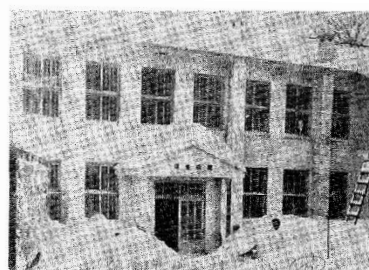
引田先生や看護婦さんたちに学会の様子を報告す。

- 一、日本の医学はアメリカ化されてきた
- 二、観念論である
- 三、東大の封建支配である
- 四、働くものの医学ではない
- 五、それにも拘らず進歩はあった

五月十八日

保健組合病院と死生を共にする役職員。困難はあった。金は集まらなかった。建物も思うように進まなかった。組合員の出資金も予定通りすすまなかった。出来つつある建物も粗末なものである。去年の八月一五日にし上げてしまう筈の工事が完成したのは、やっと今年の五月一二日であった。それなのに患者は待ってくれない。次から次へと入院を要求してくる。

組合の幹部、病院の幹部にも非難がないわけはなかった。それにもかかわらず大清水に病院はできあがった。

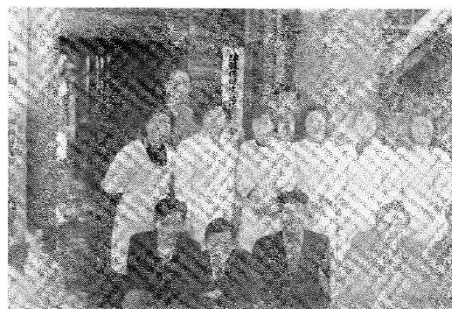


大清水精神科病棟完成

患者に尻たたかれて出来た病院だ。収容患者二一人、給食はできる。われわれの到達したのはたったそれだけである。内科と結核と精神病は収容できるが、まだ外科の施設は不十分だ。産科もない。まだまだ不十分でありこれからである。二八年の任務は外科施設を完備することである。こうして我々の組合と病院は幾多の不十分さを残しつつも、将来の発展を要求せられている。我々は大きく発展せしめなければならない。誰がこれを発展させるのであろうか。その第一は患者の要求である。

日やといの労働者、楮町の市民、豊田、五郷の農民たちは、入院、金持と同じ治療、給食、それを我々に要求している。その要求に鞭うたれて我々の病院は立っている。日本に貧乏がつづく限り、我々の病院は生きて働かねばならない。

診療の中心としての従業員。わけても苦勞敢闘しているのは従業員職員の敢闘である。



津軽保健生活協同組合の看板の下った健生医院前（品川町）

十月十六日

午後、相互銀行に病棟を説明のために大清水にきて貰う。

十月十八日

朝から「てんかん」について読書。朝七時〇〇さんを往診。

夕食後〇〇、〇〇の両名、緊急診療。夜、大清水に緊急患者にでてゆく。夜、〇〇さん往診。

十月十九日

朝から大清水の病棟の急患。夕食後大清水入院患者の緊急診断、〇〇さんへの往診。

十月二十二日

午前、午後外来診療、大清水、松木、品川町、水木病棟と全部合わせて百十人の患者を診断する。夜は医事新報とクレッチメルの医学的心理学をよむ。

十月二十三日

午前品川町にて外来診察、午後大清水病棟診療、夜往診。

十月二十七日

午前、午後外来診療。頭痛のため往診中止、よる十一時入院患者におこされ、朝三時小栗山〇〇さんまで往診。

十月三十一日

午前午後品川町で診療。青銀の今日の期限の八萬五千円熊谷さんに処理して貰う。午後五時から梅林で引田、三上、熊谷、工藤、原の五氏と肉をたべ一升のむ。八時より「健康」の原稿かき、九時金のないというルンペンの患者を診察する。

クレッチマーの医学的心理学よむ。

十一月三日

夜クレーパーリンをよむ。

十一月九日

夜クレッチメルの夢、三宅の夢について読む。

朝の二時入院患者の〇〇さんにおこされて病棟へゆく。

十一月十八日

午後、〇〇嬢の一年誕生会に引田、境沢の二氏とともに出席し、病院を医師なしに残して兼さんから抗議を受ける。

十二月二十二日

夜、患者をおこってみる。